

研究室めぐり [IX]

大阪教育大学

学校教育における天文教育の重要性が叫ばれている中で、我国の教育系大学に天文学研究室が少いのは残念である。大阪教育大学では、戦後の学制改革時に、当時の学芸学部では数少ない天文学研究室が、能田忠亮氏(現京都産業大)を中心に発足した。以来、多くの人材を教育畑に送り込んでいる。現在、ユトレヒト大学で活躍されている難波収一氏も初期のスタッフの一人である。昭和51年に清永嘉一氏(現京都産業大)が退かれ、今は横尾と定金が二人三脚のスタッフとなった。すっかり世代が交代した観の研究室では、横尾は銀河の中心領域構造及び散開星団の構造と進化について、定金は特異早期型星の分光分析、特にUV分光の解析に取り込んでいる。研究室のメンバーには大学院を含め学生達10数名が加わる。毎週土曜日のセミナーは賑かで話題も豊富である。学生向けのカリキュラムは教育学部独自のもので、4回生には、卒業研究が課せられる。毎年、そのテーマ選びには苦勞するが、若い頭脳と行動力は、時に予期以上の成果を生むことがあるのは楽しみだ。当研究室は、歴史が古いこともあって、天文学関係の多種の雑誌のバックナンバーを初め蔵書が豊富なことが特色である。大阪市大、阪大、教育センター等の研究者にしばしば利用され、大阪における天文学の文献センターの役割をしている。しかし、近年の図書の高騰で、研究費のやりくりには悩まされているのも実状である。研究設備としては、学内共同利用として、微測光度計(ミタカ製)等の測定器があり、また大阪大学計算センターと結ばれたリモートパッチシステムが稼働している。その半面、観測設備は貧弱

で、学生の実習も高度なものは望めない。天王寺の繁華街の近くという悪条件は、意欲さえもなくさせるという。しかし、私達の経験では、都会の空はシーイングだけは良いように思える。あきらめずに工夫して、大学における天文教育に相応しい実習施設を作ることが今後の課題である。ビッグサイエンスへの今日の天文学の流れにあって、小さな大学の小さな研究室の位置づけを模索中なのは私達だけではなくろう。教育系大学ということで、当然の事ながら、教育現場との繋りも密接である。また、大阪近辺の研究者を中心に、大阪天文研究会という活動があって、意欲的な社会人も含めて月に一度の勉強会が持たれ、当研究室がその場を提供することもある。このような、教育界から初めとする社会的な知的要求に大学が答えていく必要性も今後増大していくであろう。

(地学教室天文学研究室 横尾武夫・定金晃三)

☆ ☆ ☆

◇ 9月の天文暦 ◇

日	時	記	事
6	14	月	最近
6	20	望	(皆既月食)
8	15	白露	(太陽黄経 165°)
10	23	土星	合
13	14	水星	外合
13	15	下弦	
19	19	月	最遠
21	19	朔	
24	0	秋分	(太陽黄経 180°)
29	13	上弦	

